

第五章 空蟬の物語(2)

[第一段 紀伊守邸の女たちと和歌の贈答]

かの、伊予の家の(伊予介の妻なる空蟬の弟たる)小君、参る折あれど(二条院に参ることがあったが)、ことに(殊に)ありしやうなる(以前のような)言伝てもしたまはねば(文遣いの御用も仰せ付けなく、御文も途絶えたので空蟬は君が自分を)、憂しと思し果てにけるを(面倒に御思いに為って見限られたのを)、いとほしと思ふに(寂しく思っていたが)、かく(このように)わづらひたまふを聞きて(患われた事を聞いて)、さすがに(どのような御容態かと)うち嘆きけり(空に案じた)。遠く下りなどするを(夫に付いて遠く伊予へ下って京都を離れるのが)、さすがに心細ければ、思し忘れぬるか(君が自分をお忘れらになられたかと)、試みに、

「承り、悩むを(御病氣と承り案じておりますが)、言に出でては(お見舞いを申し上げようにも)、えこそ(とても、私如き下の者には恐れ多くて憚られるところで御座います)、

問はぬをもなどかと問はでほどふるに、いかばかりかは思ひ乱るる (和歌 4-12)

御身体の程はどうか、御気分の程はどうか (意識 4-12)

*『問はぬをも(私が貴方の御病氣を承りながら今まで御見舞い申しませんでした事を)』『などかと問はで(貴方も何故とお尋ねにならないままで)』『ほどふるに(月日が過ぎましたが)』『いかばかりかは(御容態も御気持も如何が御座しますかと)』『思い乱るる(気を揉んで居ります)』

『益田』はまことになむ(*<益田>の歌は本当の事でしょうか) *原文注釈では、<『源氏積』は「ねぬなはの苦しがるむ人よりもわれも益田の生けるかひなき」(拾遺集、恋四、八九四、読人しらず)を指摘。>、とある。「ねぬなは」は沼縄ヌナワの古語。ヌナワは其の新芽を食用にする水草ジュンサイの別名で、地下茎が泥中を長く這う根茎で蔓を手繰るの連想から、「根ヌナワの」という枕詞で<長き×繰る一苦し>に掛かり、「ネヌ」を<寝ぬなる一寝たまま、の病人>に掛ける、とのこと。益田池は平安初期に空海がヤマトカシハラで高取川を堰き止める堤防を築いて作った灌漑用の溜池だという。相当大きな池だったらしく、折角だからとヌナワを栽培したのだろう。「生ける甲斐なき」は<上手く育たなかった>のか<大量で収穫作業が面倒だった>のか、何れにしても大儀だったのだろう。「益田」は<増す>だ、「池」が「生け」を生かす。したがって引歌の意味は、「ネヌナハノ(病気で寝込んで)繰るしからむ人よりも(苦しがつている人よりも)我も(私こそ)増田の活ける甲斐なき(益田池のジュンサイ採りに明け暮れるだけで益して余程生きる甲斐がありません)」、という妙に凝った戯れ歌なのか作業歌なのかで、為時女が採用したのも分かるような。此の「益田」の歌が本当か? とは、本当に病氣が大変で御文が無いのか、御文の相手にされていないだけなのか、と聞いているワケだ。

と聞こえたり(という手紙を差し上げてみた。すると源氏は)。めづらしきに(久しぶりの空蟬の便りが珍しく)、これもあはれ(この女への恋慕も)忘れたまはず(お忘れではない)。

「生けるかひなきや(生き甲斐が無いなどとは)、誰が言はましことにか(どっちが言いたいものやら)。

空蟬の世は憂きものと知りにしを、また言の葉にかかる命よ (和歌 4-13)

残り香ばかりの空蟬に、温もり偲ぶ深情け (意識 4-13)

*「空蟬の」は無常の意味で「世」「命」「人」などに掛かる枕詞。そこで前節は、「無常の世は俣為らないが」、という一般論で直情を避けて置く。と同時に、実際に衣を残して去った此の女君を「空蟬」と喩え、「世」は其の男女の仲を指し、「憂きもの」を失恋として、「貴方にはすっかり振られたものと思っていました」と愚痴る。そして後節は、「せめて言葉に情けを託そう」、という一般論で包容力を示す一方で、「そう言われると亦、虫が騒ぎます」と色気を覗かせる。

はかなしや(頼り無いものです)」

と(と病後ゆえに)、御手もうち(お手もつい)戦慄かるる(わななかるる、震えてしまう)に(ままに)、乱れ書きたまへる(乱れ書き為された御返書は)、いとど(大層)うつくしげなり(趣き深かった)。なほ(また今も尚)、かの母抜け(もぬけ、脱ぎ捨てた小桂)を忘れたまはぬを(源氏がお忘れでなかったのを、空蟬は)、いとほしうも(愛しくも)をかしうも(嬉しくも)思ひけり(思った)。

かやうに憎からずは(このように思わせぶりな文は)、聞こえ交はせど(遣り交すものの空蟬は)、気近く(けちかく、実際に君と近く親しく)とは思ひよらず(とは考えても居ないで)、さすがに(せめて)、言ふかひなからず(何を言っても仕方のない詰まらない女などではない)は(とだけは)見えたてまつりて(源氏にお思い頂いて置いて)やみなむ(終わりにしたい)、と思ふなりけり(と思っていたのです)。

かの片つ方は(また、もう一人の伊予介の姫君のほうは)、蔵人少将をなむ通はず(かよはず、通わせて結婚している)、と聞きたまふ(と源氏は聞いていらした)。「あやしや(姫君に他の男が居そうだと疑えば)。いかに思ふらむ(少将はどう考えるものなのだろう)」と(と源氏は)、少将の心のうちも(内も、思惑も)いとほしく(慮り)、また、かの人(伊予介の姫君)の気色も(けしきも、様子も)ゆかしければ(懐かしかったので)、小君して(小君を遣いに立てて姫君に)、「死に返り(しにかへり、死ぬほど強く)思ふ心は(慕う心を)、知りたまへりや(御存知でしょうか)」と言ひ遣はず(と手紙を送られた)。

「ほのかにも軒端の荻を結ばずは、露のかことを何にかけまし」(和歌 4-14)

「軒端の荻の露垂れを、知っているのは誰れと誰れ」(意識 4-14)

*荻はイネ科の多年草で高さ2メートルになりススキより大型、とある。「軒端の荻」は軒先に掛かるような荻だが、姫君の背の高さを軽口めいて例えたもので姫君自身を指す。ただ、「仄か」「軒端」「結ばず」と並べた言葉選びが、「露」の一点に集中して掛かるところに此の歌の情感が見える。「露」は「少しばかり」を意味するが、それ自体が「光る水」ではある。後節、「露の託言」は「少しばかりの愚痴さえ」で、「何に掛けまし」は「何に対して、言えるだろうか」、となるので全体の意味としては、「たった一度でも貴女と結ばれずに居たら、未練の一つも言えない所でした」、と源氏は姫君に少将との結婚を恨んで見せている。そして「露」への未練を強く滲ませるイヤラシサであり、趣の深さというところだろうか。

高やかなる萩に(丈高い萩の穂に)付けて(其の手紙を結びつけて)、「忍びて(内密に、届けよ)」とのたまへれど(と源氏は小君に仰ったが)、「取り過ちて(とりあやまちで、姫君が取り損なつて)、少将も見つけて(少将の目にも止まって)、我なりけりと(姫君の浮気相手が参議兼近衛中将の源氏たる此の私だと)思ひあはせば(少将が判じ付けたとして)、さりとも(それでも他ならぬ此の私なら、少将は)、罪ゆるしてむ(罪を許すことだろう)」と思ふ、御心おごりぞ(と思う源氏の思い上がりというものは)、あいなかりける(始末の悪いものでした)。

少将のなき折に(そこで小君は少将の居ない隙を見計らって、姫君に源氏の手紙を)見すれば(渡したが)、心憂しと思へど(姫君は彼れ切り一度も会いに来ない源氏を恨めしく思っていたが)、かく思し出でたるも(こうして思い出し頂けると)、さすがにて(やはり嬉しくて)、御返り(御返事を)、口疾き(くちとき、早く申し差し上げる)ばかりを(事だけを)託言(かこと、言い訳)にて取らず(にして小君に取り次がせた)。

「ほのめかす風につけても下萩の、半ばは霜にむすぼほれつつ」(和歌 4-15)

「たまに吹く風くらいでは、枝垂る萩さえ並引きません」(意識 4-15)

*「ほのめかす風」は「恋心をほのめかした源氏の手紙」だが、今までの無沙汰を思えば姫君もさすがに之が、源氏の口先だけの思わせぶりだと分かるので、其の実は「頼りない便り」だと思っている。だから自分を「下萩(しもおぎ)」と言って「下の者」と卑下してはいるが、土に近い萩の下葉は「風につけても」其の露は「半ばは霜に」凍りついて「結ぼほれ(固まって解けない)」「つつ(でいる)」、と言う素っ気なさを見せる。源氏が露への未練を滲ませて挑発した贈歌に対して、相当冷ややかな返歌となっている。当たり前だ、一回遣っただけでよく言うよ。

手は悪しげなるを(字が下手なのを)、紛らはし(誤魔化して)さればみて(手馴れた風に)書いたるさま(書き崩した姫君の文面は)、品なし(しななし、頂けなかった)。(それでも源氏は久しぶりに便りを交せば、紀伊守邸で碁に興じていた二人の女君の)火影に見し顔、思し出でらる。「うちとけで(慎み深く)向ひゐたる人は(向かいに居た空蟬は)、え(今でも)疎み果つまじき(嫌気が差し難い)さまもしたりしかな(身嗜みをして居たものだ。それに引き換え姫君は)。何の心ばせ(気遣いといったものが)ありげもなく(在りそうもなく)、さうどき(はしゃいで)誇りたりしよ(遠慮のないことだった)」と思し出づるに(と思い出してみると)、憎からず(懐かしい)。なほ(やはり)「こりずまに(性懲りもなく)、またも徒名(あだな、浮き名が)立ちぬべき(立ってしまいそうな)」御心の(源氏持ち前の)すさびなめり(気紛れなのだろう)。